

被災者の今

震災から4年が経った今、マスコミは被災地や震災のことに関心を失い、震災関係の話は3月11日の前後以外にはほとんど報道されなくなっています。そんなことを考えていた時ちょうどこの北上FSの存在を知り、実際にこの目で被災地や被災者の方々が今どう生きているのかという現状を見たい、知りたいと思ったのが私の参加のきっかけでした。

実際に5日間参加した中で、私の中でSさん一家という家族の存在が大変印象的でした。「家族三人で小さな仮設住宅に住んでいるため、大の字になって寝ることが今の夢だ」と語る一家に被災者たちの過酷な生活の現状を垣間見ました。また、被災地はまだまだこんな現状なのに、2020年の東京オリンピックに向けての準備が着々と始まっており、それによって被災地支援のトラックが減っているそうです。被災者の方々からすると、まだまだ復興なんて到底先で、やはり先ずは自分たちの生活をなんとかしてほしい、新しい家に早く移り住みたいという行政への不満を抱えているようでした。「いま、私たち被災者は弱者で、難民なんだ。そんな弱者を国はどんどん弱くする」という言葉に、ただの一人の大学生で何もできない自分に悔しさを感じました。

そして、夜にSさん一家の息子さんがとても興味深い話をしてくれました。それは震災で被害に遭われた方々の幽霊話でした。瓦礫で挟まれて亡くなったおじいさんの話や勝手に飲み物が出る自動販売機の話など、普通に聞いたらただのホラーのコンテンツとして楽しめるであろうものがなんだか虚しく悲しく聞こえ、切ない気持ちになりました。

このように被災地、被災者の現状はまだまだ復興とはほど遠いものですが、そんな中でもSさん一家は底抜けに明るく生きていました。

それは、近所付き合いや思いやりの精神の強い田舎ならではのだからと一家は話します。震災当時も周りの人と争うことなく、皆自分より周りを気にして協力し合いながら生活していたそうです。

私自身も、彼らのこの底抜けの明るさはずっと海の近くで生きてきた『浜っ子』だからこそそのエネルギーだと漁業支援などを通じて感じました。

「大変なのは誰だってみんな一緒。ここで立ち止まったらいけない。私たちは前に進むしかないんだ。」そう語って笑う一家の笑顔は、震災があったとは到底思えないほどに輝かしいものでした。